

番外編

ウナガ  
翁長のよんしい

字翁長の方言調査の場で、旧暦八月七日〜十五日にかけて行われるよんしい行事の話を目にしました。初日の七日には、ムチクワートウエーといって、集まった人全員に餅が配られると聞き「これはぜひ見に（貰いに）いかなくっちゃ」と思い立ちました。

よんしいとは、蛇型をした藁製の綱のことで、女の子たちがそれを頭上に乗せ部落の聖地シージモーとティランキーを七回往来するという行事です。シージモーとティランキーに着くと、女の子たちは円陣をつくり先頭の女の子の持つよんしいの口に、後の女の子のもつ尾をつっこんで、七回

めぐります。また、往復するあいだは「よんしい、よんしい、翁長のよんしい」とかけ声をあげます。

このよんしいの往復は、旧八月七日〜十五日の間毎日行なわれ、その初日にあたる七日は、シージモーに集まって餅を配るムチクワートウエーがあるのです。

その時、子どもたちはみんなわれ先にと手をのばして待っているの、餅をバラまいても地面に落ちることはなかったといえます（字翁長・城間文子さん・西原善榮さん・西原裕昌さんらの話）。つまり餅が落ちる前に誰かの手に納まっていたということですね。

この行事も戦前は餅だけでなく、こんぶやごぼう・肉などといった料理も配られた

といえます。

よんしいについては、少年期を翁長で過ごした沖繩の歴史文化研究家の比嘉春潮も「翁長旧事談（注①）」のなかで、一よんしいのこととして次のように取り上げています。

…この「よんしい」は、翁長独特のもので、西原間切やその他近い所には、こんな行事はない。だから往復の途中も「翁長のよんしい」と特にいうのだ。…

また、翁長村では「カニの鳴る前に屋敷御願はすませる」ようになっているといわれ、カニ（銅鑼）の鳴り響くよんしい行事の前に各家の屋敷の御願を終えておくのだそうです（他村では旧暦八月十日までとしている）。



△シージモー・ティランキーの位置図

春潮の記述する翁長のよんしいは、昭和四十七年の調査報告（注②）と比べてみても、時代の流れとともにすこしづつ変化しているようです。

今年（注③）は、九月八日が旧暦八月七日にあたりました。この日の午前中によんしいを作り、聖地の清掃が行われたようです。よんしいは、公民館側の火の神前にトグロ巻にして安置されていました。張り切っ

て見学に出かけたのですが、あいにくムチクワートウエーは中止になるとのこと。また近年子どもたちの参加も少なくなっているようです。昭和四

十七年は六メートルほどであったようですが、今年の綱は約二メートル三十センチでした。翁長のよんしいに限らず、時代の影響による内容の変化は避けられないとしても「このような伝統行事が（廃れずに）今後も引き継がれて行われてほしい。」そう願いつつ、来年にはぜひ餅をもらってみたいなあ。

注① 昭和八年六月〜昭和九年七月『島』に連載、ここでは「翁長旧事談」『比嘉春潮全集第三巻』沖繩タイムス社 昭和四十六年を引用。  
主に春潮が少年期を過ごした明治時代の翁長村のことが記されている。

注② 平敷令治「沖繩の綱引き」『沖繩の祭祀と信仰』第一書房 平成二年

△「火の神前に安置されたよんしい綱」

